娑羅双樹

薔薇の棘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
娑羅双樹

【Ｎコード】
Ｎ３１８０Ｊ

【作者名】
薔薇の棘

【あらすじ】
奇想天外なＧクラスの面々が数々の問題に立ち向かっていく！ってな感じに
なるはずです。
どうなるかは作者にも分かりません。

お気に入りの小説が更新されないときに呼んでいただければいいなぁと
思っています

０１　転入生登場！やっぱり定番だよねー（前書き）

はじめまして薔薇の棘です
初投稿で見苦しいと思いますがどうぞ温かい目でこの小説を読んでください

この作品は薔薇の棘が一度ミスって短編で投稿してしまった作品です

01　転入生登場！やっぱり定番だよねー

世の中は戦争の痛手から
立ち直り戦争などなかったように平和に暮らしているそんな中、
巷ではある暗殺者とハッカーが噂になっていた、
しかしある時ぱったりと消息が途絶えてしまったらしい・・・
今は死んだ事になっていて、かかっていた賞金も一部減額されている。
もっとも賞金がかかっているのは暗殺者だけらしいが・・・

さてそんな時、第三国高等魔法技術学校Ｇクラスに
２人の女子生徒が転入してきた。

ガヤガヤ
「あ～、暇だー」
ザワザワ
「ねー」
ガヤガヤザワザワ
「ってかなんでこんなにうるさいんだよ！」
「あら、知らないの？
なんか転入生が来るらしいわよ」
「転入生？いまの時期にか？」
「ええ、しかもこのＧクラスによ」
「へー、そりゃ珍しい」
～～

「あ～、緊張するわ」
「あんたが緊張するなんて珍しい明日雪でもふるのかしら」
「ヒドッうちだって緊張くらいするよ～」
「ふぅん、残虐非道と名高いＰＯＩＳＯＮ様が緊張ねぇ」
「うっせぇなその名前で呼ぶなＢＬＡＣＫ」
「ハイハイ、あんたもその名前で私を呼ばないでよ」
「分かってるよ沙羅姉」
「それでは、行きましょう樹花」

～～
ガラガラ
「おっ、来たみたいだぞ」
「あ～、皆知ってるとは思うが転入生が来たぞ」
「何人なの？」
「男？女？」
ザワザワガヤガヤ
「うるせぇな黙ってろ縛って埋めんぞ」
シーン・・・。
「よし、転入生は・・・
めんどいから説明はいいなおい、入ってこい」
ガラガラ
で、入ってきたのは明るそうな少女と穏やかそうな
とても似た少女
「私は一ノ瀬樹花でーす☆ヨロシクね！」
「私は一ノ瀬沙羅と言います。樹花の姉です。これからよろしくお願いします」
挨拶１つで姉妹なのにここまで違うのかと驚いた。
クラスの奴らは早速いろいろと喋っていて正直うるさい

「あー、んじゃ一ノ瀬樹花はそこ一ノ瀬沙羅はその隣の席な」
「はぁい♪」「はい」
「じゃ、これでＨＲは終了だから好きにしろよ」
と言って担任は出ていった

・・・てか担任テキトーすぎないか？

０１　転入生登場！やっぱり定番だよねー（後書き）

誤字脱字や感想、こうしたら？というもの等
なんでもＯＫですがいたずらは作者のメンタルがぼろぼろになるので
やめてください。

更新は週１くらいにする予定です。

０２　ビンタって結構あとで来るよね（前書き）

こんな小説でも見てくれている人がいる事に
感動しました。

アクセスしてくれた皆さん本当にありがとうございます。

02　ビンタって結構あとで来るよね

～ＳＩＤＥ　沙羅～

「どこから来たの？」
「何人家族なの？」
「何処に住んでるの？」
私たちは今、質問責めにあっていた。

てゆーか聖徳太子じゃないんだから1人ずつ話して欲しいと思う。
私は淡々と樹花は明るく質問に答えていると、質問に参加しないグループが目に入った。

「すいません、あの方たちは？」と私が聞くと
「あー、あの人たち？なんかいっつも一緒に居るし感じ悪いんだよねぇ」
1人の女子生徒が言うと、
「だよねだよね」
「イベントにあんまり参加しないしね」
「仲間内だけで仲良くしてるしさ」
と此方が驚くくらい出てきた。

逆にここまで言われている人たちに興味が出てきた。
「では樹花、私はあちらに行ってきますね」
そう言って私はその人たちのところに歩いていく。
「ん、行ってらっしゃい」
後ろで文句を言っていた女子生徒たちが驚いているのが、分かった。

～ＳＩＤＥ　？？～

２人の転入生が質問責めにあっていた。
それをボーッと見ていると
「ねぇ、あの転入生こっち来てるんだけど」
「はぁ？うっわまじかよ来ても大した用じゃねぇだろ適当にあしらおうぜ」
「りょーかい！」

「あの～、すいませんお仲間に入れていただけませんか」

・・・？なに言ってんだ
コイツ？
「はい？」
「すぐ了承していただけるなんてありがとうございますよろしくお願いします」
こいつは耳がおかしいのか？
「んー、こちらこそよろしく～」

【おいっ、何簡単にＯＫしてんだよ】
【良いじゃん最初は様子見してダメだったら、はじけば】
【まぁ、そうか】
「よろしくな」

それから１週間が過ぎた。あんなに騒がしかった転入生の２人の周りも何事もなく、
いつもと同じような平穏な生活が戻ってきていた。

そしてあの転入生は何故かここに馴染んでいた。
・・・。
「ってお前は何で馴染んでんだよ！」
「いきなり大声出してなんですか？とうとう頭のネジでも外れましたか？」

会って1週間の人間に言うにはなかなか辛辣な言葉ではないだろうか

【おい、美鈴なんでこの女まだここに居るんだよ？】
【んー新しくここに入ってきたから実力も分からないし見た目弱そうだから
女子たちも結構虐めてるんだと思うんだけどな～】
【んじゃもうすぐ音をあげるか】
【てか普通はもう転校するか不登校になっててもおかしくないよ？】
【1週間でそこまでって女子って恐いな】
【まぁ、下駄箱に虫なんて日常茶飯事みたいだしね】
【何でそんな事お前が知ってるんだよ？】
【トップシークレットだよ】
【そういえば何でコイツはそんな事されてるのにまだここに居るんだ？】
【さぁ？聞いてみたら？】

「なぁ、お前虐められてるのか？」
少し直球すぎだろと思いつつ、普通は答えないよなー
「あぁ、下駄箱に虫が入っていたりしましたね新手の歓迎の方法だと思いましたが？」
「いや、気づけよ！それを世間ではいじめって言うんだよ！」
「へぇ、新しい知識をありがとうございます」
「そういえば、もうすぐテストがあるそうですね」

「あぁ、そんな季節だなお前って強いのか？」
「いえ全然、人並み程度ですよ」
「ふーんじゃあ死なないように頑張れよ」
「どういう意味ですか？」
「そのまんまの意味だよぉ～♪」

「そういえば、貴方たちの名前はなんでしょうか？」
「え！？教えてなかったっけ？」
「ええ残念ながら」
「んじゃ私は朱月美鈴だよよろしくね～」
「俺は神宮寺紫苑だよろしくな」
「こちらこそよろしくお願いします」

「ところで、テストとはどんなものなのか教えていただけませんか？」
「あぁいいぜ美鈴」
「ラジャー、テストっていうのは筆記試験と能力試験の２つに分かれていて
４日に渡ってするのぉ～」

「能力試験とは何でしょうか？」
「あっ知らないんだぁあのねぇ本当に何でも良いんだけど自分がコレって
誇れるものを先生たちに見せるのぉ」
「へぇ、そうなんですか貴方たちは何を見せるんですか？」
「俺は武術かな」
「私も～てか、このクラスの人たちはほとんどそうじゃないかな～」
「なぜですか？」
「みんな腕自慢だからね」
「聞いた話にではＧクラスというのは、いわゆる落ちこぼれといわ

れる人達の集まりだ
と聞いたのですが」
「ところが！この第三国のGクラスは違うんだなぁ沙羅ちゃん♪」
「どのように？」
「つまり、簡単にいうと、ここのGはどこのAよりもヤバイんだよ〜以上」
「美鈴かいつまんでいいすぎだ」
「はぁい←あのね、ここのGの人間はね最低でもδクラスの犯罪者の集まりなんだよ☆」
「そういえばそんな事を聞きましたねで、貴方たちのランクは？」
「私はεランクの上だよ」「俺はζランクの下だ」
「じゃあ、紫苑君のほうが強いんですね」
「まあな、でお前」「沙羅ちゃん」「「のランクは？」」
「私にランクなんてものはありませんよ」
「「は？」」
「はぁ、とうとう耳まで腐り果てましたか、もう一度言いますね、私にランクなんてものはありません、いいえもっと正確に言うと私は一般人です」
「「はぁー！？」」
「うるさいです。周りの視線が冷たいです」
「いや、だってお前そんな事あり得ねぇぜ」
「そーだよ沙羅ちゃん」

「実は樹花が自首する事と引換に私も同じクラスに入れろなどと言いましてね」
「いや、そういう問題じゃないと思うけど・・・」
「いえ頸動脈にナイフを突きつければ、この国のトップでも楽勝ですよ☆」
一気に空気が凍った。
「俺、もう何が起こっても驚かないぜ」

「私もだよ・・・」
「話を戻して下さい」
「うん・・・」
「あの、起きてますか？」
「あーうん・・・」

スパァンと光速に迫るスピードで平手打ちが繰り出された。

・・・かなり痛いてか、超ジンジンする

０２　ビンタって結構あとで来るよね（後書き）

誤字脱字や感想、こうしたら？というもの等
なんでもＯＫですがいたずらはやめてください。

更新は週１くらいにする予定です。
今回はおそらく例外です。

０３　学校探検へＧＯ！（前書き）

今日は祝日という事で更新してみました☆

一週間に一回更新のはずだったのに・・・

きっとそのうち失速します

０３　学校探検へＧＯ！

前回、ビンタされました。まだヒリヒリしてる・・・痛てえ

～ＳＩＤＥ　紫苑～

「話を戻して下さい何度も言わせないで下さいね
次は無いですよ？テストは筆記試験と能力試験があるという所までは聞きましたから」
「はい・・・ごめんなさいテストはＧクラスだけ別なんです」
あーあ、美鈴ビビッてるようわ、足超震えてるわ

「実力がばれないようにするためですね　あぁ面度くさいんでもう敬語じゃなくて良いですよ」
「うん、そうだよてか、沙羅さ・・・ちゃんはテストどーするの？」
今、様って言おうとしたな

「まぁ当たらず触らずですかね」
「大丈夫なのか？」
「何がですか？」
「いや、ばれないのかっていう事だよ」
「大丈夫ですよ、どうせ樹花のを見た時点で私の印象なんか大抵の人は忘れますから」
そう言って笑っているがそんな事普通ないだろう
「ふーん、そんなに凄いのか？お前の妹は」
「見た感じ明るそうな普通の子だったけどな～」
「普通の子だったらこのクラスには居ないと思いますが・・・。

そういえば、他のクラスを見てきてもいいんですか？」
「なんでぇ？」
「いえ、駄目ならいいんですけど、「ダメじゃないけど何で？」話を最後まで聞いてくださいね」
「はい…」
てゆうか、この女ってかなり自己中だよな

「ちょっと他のクラスも見てみたいと思ったんですよ」
「あっ、でも行くんだったら行くクラスでリボンの色変えた方が良いよ」
「なんでですか？」
「Gクラスってだけで差別されるからね～」
「なるほどご忠告ありがとうございます、けれど私はこれ一本しかリボンを持っていないのですが」
「あっそーなんだ、んじゃ私の貸してあげるよスペアあるから」
「ありがとうございます」

ちなみにGクラスのリボンは栗色でAが赤、BとCは橙色、EとFは黄緑っぽい黄色である
ネクタイはワンポイントで色が入っていて、黒が基調である

「お前ら他のクラス行くのか？」
「はい」
「んじゃ、いってらー」
「何言ってるの？」
「紫苑も行くんだよ？」
「俺は行かねぇよ」
「なんでですか？」
「美鈴と一緒に行くと必ず騒ぎが起きて巻き込まれるから」

「そんな事ないよぉ」
そんな事あるよ、誰だよこの前Ｃクラスに行った時思いっきりＣの奴らに頭突きして
逃げたやつは、あの後何故か俺が平謝りしたんだぜ本人は逃げたのに

「そういえば、紫苑君もネクタイたくさん持ってるんですか？」
「ああ、コイツと一緒にいるとこういう機会が多いからな」
「皆さんそうなんですか？」
「いや、普通は持ってねえよ」
「じゃあなんで持ってるんですか？」
「購買部の奴を脅したりして」
「あたしは紫苑と違ってやさしく頼んだんだよ」
「殺気出しながら話す事が優しくか？」

「ふーん私もやってみよ」
小声で言ってたみたいだけど、聞こえてるし
こりゃ、死んだな購買部の奴らご愁傷様だな

「じゃあ紫苑君も行きましょうよ」
「どうしても？」
「「どうしても」」
見事なハモりでそこまで言われたら行くしかないだろう
てか、断ったら後が怖い

…今ヘタレだと思った奴
後でこっち来い、話がある

「じゃあ、美鈴ちゃんと愉快な仲間たち！他クラスへ探検にＬｅｔ'ｓ　ＧＯ！」

愉快な仲間たちってオイてか、自分の事ちゃん付けってどうよ
「愉快な仲間たちって面白い名前ですね採用ですね」
面白い名前なんだ…感性がちょっとおかしいのかな？採用って何に？とか思ったり、
そしてちゃん付けについてはスルーなんだ

「Ｆクラスの前に私たちは着きましたー☆」
「美鈴誰に言ってんの？」
「神様兼読者の皆さまにだよん」
「だよんとかキモっっ！」
「うるさいゾ☆紫苑君♪」

一体誰だよつーかキャラ壊れてないか？

「何馬鹿どもがバカやってるんですか？」
「「はい、申し訳ありませんでした沙羅様」」
「様とかキモいとか思わないんですか？こんなたくさんの人たちの前で
私は別にそういう趣味じゃないんですけど」

最近コイツ俺らに酷くねえか？

「へぇ、Ｆクラスってこんな感じなんですか」
「Ｅも大して変わんないかな？」
「授業の内容はどうなってるんですか？」
「基本５大元素魔法をやってるね上級魔法とか特殊系を使える人はいないよ」
「Ｅはそれよりは若干成績が良い奴らかな」

「んじゃ、次はCクラスに行ってみよー！」
「「ラジャー隊長！！」」
皆ノリノリだなぁって俺もか

０３　学校探検へＧＯ！（後書き）

と言うか、樹花が全然出てきてないですね
いずれ出したいと思います

誤字脱字や感想、こうしたら？というもの等
なんでもＯＫですがいたずらはやめてください。

０４　てか、この学校ってドンだけ大きいの？！（前書き）

ジャスト1週間で更新してみました☆

それでは、どうぞ

０４　てか、この学校ってドンだけ大きいの？！

～ＳＩＤＥ　美鈴～Ｃクラスのあたり

私たちは今Ｃクラスの方々に囲まれていた。

全員見るからに魔法よりも殴るほうが得意ですと、言わんばかりの体型である。

俗に言う、筋肉バカって奴か

そんな事を考えていた

何で私たちがこんな目にあっているのか、と言うと

【遡ること１０分前】

私たちはＣクラスに着いて浮かれてたんだね・・・

「わー、凄いですねー！」

「でしょ～♪ＥとＣでこんなに違うんだよ」

「これでは、皆さん躍起になってクラスを上げようとするのも分かりますね」

ちなみにＣクラスはＥクラスの２倍くらいで、

Ｅクラスは普通の教室くらいの大きさになっている

「あっちに行ってみましょうよ」

「うん良いよ☆」

そして私たちは校内を走っていった

「お前ら問題は起こすんじゃないぞー！！」

遠くでこんな声が聞こえたんだけど、そのときは
紫苑は過保護だからなーくらいにしか思っていなかった。

「大丈夫だよー！！」
後ろを向いてそう言ってまた走る
だって初めてここまで続く友達ができたんだもん

今までの子達は皆すぐに殺しちゃったから・・・
だって、私の悪口を陰でこそこそ言っていたんだ。
私がそれを知ってるって何で分からなかったのかな？
それを教えたときのあの歪んだ顔、傑作だったね

私はチラッと隣にいる女の子を見た
取り立てて美しいわけでもないどこにでもいる女の子
あのGクラスにおいて自分は一般人だと毅然と言い放った女の子
そして何よりクラスで関わろうとせずに壁を張っていた私たちに平然と
その壁をすり抜け、仲間に入れてくれないか？と言った、

初めてできた私の大切な，友達，

最初は何かと思ってビックリしたけどねぇ・・・☆

とそんな思考に耽っていると

ドン

案の定、誰かにぶつかった。

「あっ、ごめんなさ～い」

「おい、ごめんで済むと思ってるのか？」

・・・あぁめんどくさい事になりそうだな

０４　てか、この学校ってドンだけ大きいの?！（後書き）

はい、樹花またもやでませんでした・・・（泣）

今回は美鈴がただの能天気バカじゃない事を知ってほしくて書きました。

まぁ、こんな子でも人を殺してるっていう再確認?ですかね

０５　トロール登場（笑）（前書き）

いつの間にかアクセスが２００を超えてました！！

ユニークアクセスも１３０を超えていました！！

読んでくれている皆さんありがとうございます！！（嬉泣）

05　トロール登場（笑）

あらすじ、変な奴とぶつかった。

「ごめんなさ～い」

なんだろうコイツうっわ凄い
モロ貴族のどら息子って感じだなぁ・・・後ろにいるのは取り巻きかな??

「おい、そこの見るからに庶民そうな女2人」

見るからに庶民・・・そんなに庶民かなぁ、凹むわぁ

「おい聞いているのか?まったく、これだから庶民は・・・ごめんなさいですむと思っているのか?」

うわー、でっかい独り言だなぁイラッとくる・・・後ろの奴らもきっと貴族だな～

「ふざけ「すいません、今回は私どもの不注意と言う事であなた様の器量で私たちを
許しては頂けませんでしょうか?」

沙羅って凄いな～あんな風に言われて怒ってないのかな?・・・

「そんな態度でこの俺様が許すと思ってるのか?平凡そうな女、土下座して俺様の靴をなめろ」

ぴきっ

「沙羅ちゃんにそういう事言うなぁ！！」

ローリングスペシャル美鈴カトリックゴートゥーザヘルキィッック！（ただの回し蹴りです）

あー♪決まっちゃった♪あのブタ吹っ飛んじゃった♪すっきりした～

「お前！！俺様を足蹴にするとは！俺様を誰か分かっているのか！？」

・・・誰？？

いやいや、ここは無難に

「貴族？」

「そうだ！俺様はこのロッテルダム領を治めているカロール家の嫡子レティオス＝H＝カロールだ！」

カロール家、カロール家・・・あぁ、厭らしい政治で有名な家かそんな家じゃこんな子供でも仕様がないか

「美鈴、あの～カロール家って名家なんですか？」

とこっそり沙羅が聞いてきた

やっぱり普通の人はそういうの気にするのかな？

なので一応
「うん、そうだよ☆」
脅しをかけておいた。これでびびるのかなぁ？
「へぇ～そうなんですか」
うすっ！反応薄っ！！
山○山の海苔せんべいのせんべいくらい薄い！
皆知ってる？山○山？海苔せんべいがおいしいよ★知らない人はググッてみてね
・・・伏字をしてるのにどう調べろと？
「それで、私たちはどうすればいいんでしょうか？・・・トロールさん？」
トロール！？どんな間違え方なの？！
あー、もうあっち青筋立っちゃってるし唇もヒクヒクなってるわー
素なのかな？それとも・・・あっ確実にさっきの仕返しだ～顔が超笑ってるもん

「ふざけるな！！さっきから人をバカにするのもいいかげんにしろよ！！！」

そう言ってブタさん（沙羅曰くトロール（笑））が何かの術を詠唱し始めた

・・・なんだろうな～、この術は・・・

０５　トロール登場（笑）（後書き）

誤字脱字や感想、こうしたら？というもの等
なんでもＯＫですがいたずらはやめてください。
短いとかはスルーの方向でよろしくです

０６　全然堪えてないのね・・・（前書き）

新しく名前が出てきたりしますが、覚える必要はまったくないんで覚えなくて結構です

あと、～ＳＩＤＥ　○○～って入れてみました。読みやすくなっていれば幸いです

06　全然堪えてないのね・・・

～ＳＩＤＥ　沙羅～

トロールが術を詠唱している。

隣にいる美鈴はそれをただ見てる

きっと、こんなのがやってるから大したものじゃないって高を括ってるんだろーな

そういうのが、命取りになるのに・・・

さて私たちの前にいるカロール（・・・いや、トロールでいいや）は明らかに自分が発動できる最高位の魔法を発動しようとしている。

魔力の収束率がハンパない、きっと雑魚い奴なら今頃干からびてるなってことは一応ソコソコの魔力はあるって事かな

普通の人は見えないからな～これは油断するわ・・・

ただ突っ立てるだけに見えるもんなぁ

・・・・・・・・・・・・てゆーか詠唱に時間かかりすぎじゃね？

あ～でもな～、本気の戦闘なんかした事ない奴ならこの速さでも良い方か？

こういうタイプは沢山の歩兵に守られてる攻撃してくるからな

戦場なんかいった事ないけど・・・（笑）
きっとそういう感じだよ・・・うんイメージだよ！イメージ！！

～ＳＩＤＥ　樹花～

どこか近くで魔力が膨れ上がってる気配がした
「ん？」
「どしたの？樹花？」
「ううん、なんでもないよ～」

そう言いつつも何か嫌な予感がしたからその気配の近くを探ってみる

「ふ～ん、あっ！そんでね～ショーンの彼氏がね２股かけてたんだってよ」
「えーっっ！！うそーっ！ショーン最悪じゃーんアハハハ」

そんなバカみたいな話を聞きながら探っていると、その気配の近くには沙羅の気配と
もう１つの気配があった。場所的に見ても標的はその２人のようだ

・・・大丈夫だろうけど一応沙羅にがんばってって言っとくか

【沙羅～？】
【何？樹花？】
【いや、もう知ってるとは思うけどあんたのすぐ近くに膨れ上がってる魔力があるから】
【あぁ、目の前にいるよ】
【大丈夫？あんた力派じゃないでしょ？】
【まぁあなたには劣るけど、この程度の相手には負けないよ？】
【あたしには劣って良いんじゃない？】
【私は頭脳派ですから☆】
【とりあえず、がんばってネ、あと今日こそは一緒に帰ろう？】
【えぇ～、樹花と帰るとその次の日に確実に上履きがないんだけど～】
【あれはちょっと過激すぎるよね～大丈夫？】
【うん、まだまだ殺しにきてないからね】
【結構遅いんだね？】
【捕まってから腑抜けになったか、元から大した事ないんだろうね】
【うわっそれキッツー！】
【あっそろそろだから切るわ～じゃーねー！】
【うん！バイバーイ！】

あ～、沙羅と話すの久々だったな～♪

「樹花？」
意識が念話から戻ってくると女子生徒の・・・あぁクリスティーナ（だっけかな？）が
心配そうに見ていた

「うん？なーにー？」
「ぼーっとしてたからどうしたのかな？と思ってさ」
「なんでもないよ～」

さぁて、くだらない話にでも加わろうかな？

～ＳＩＤＥ　沙羅～

さてとっ、久々に樹花ともおしゃべりできたし、がんばりますか！

かわいい妹と面白いお友達のためにね

０６　全然堪えてないのね・・・（後書き）

やっと樹花登場！

で、思ったんですが、このままの流れでいくと
コメディキャラがいてもソイツの心理描写を入れると、
重くなるかも・・・なんでがんばって書いていきますけど、
がんばって皆さんも読んでくださいね！！

07　いい加減本題に入ってほしい・・・（泣）

～ＳＩＤＥ　沙羅～

樹花との念話を切った。

がんばってか・・・その言葉って今の私たちには必要ないんじゃない？

がんばるって言っちゃったからな・・・

ま！いいや、ちょうどトロールの魔力収束も終わったみたいだし～取りあえず様子見かね～

「見ろ！これが俺の最終奥義『虚ろな世界―ホロウザワールド』だ！！」

ありゃ～これはやばいわ～

ってかこれが最終奥義ってえげつないわ・・・そこまで凄くはないけど（笑）

ここは普通の人だったら様子見だな。
もちろん美鈴もそうなはｚ「取りあえずここは特攻！！」

えぇぇぇ！！

「ちょっ！待って美鈴！」

「覚悟！！」

ちっがぁう！何が覚悟じゃボケェ！！

絶対それ無理だから！！そんな方法じゃ勝てないから！

あ、でも良い線いってる強いんだね結構

限界かな？

とぽん

小さな音が聞こえて美鈴の手が飲み込まれ始めた

ここまで、出来れば合格点かな？

「なッ何よこれ！？」

あ～でもな～頭は結構だめかな？寧ろ赤点？技術はあるんだけどな・・・

「さっ沙羅！！あんたは逃げて紫苑を呼んでき・・・」

どぽんっ

でも紫苑くんと仲良いから、もしかして昔組んでたのかな

だったら、２人で丁度いいかな？あの子きっと頭脳系だろうし～

今度聞いてみよっと♪

って！！いないし！！あ～！考えてる間に聞こえた大きな音か、あれが飲み込まれた音だったか・・・

・・・今度からは集中しすぎないようにしよう

うん、決めた！これ、絶対だわ

まず、紫苑くんを呼ばなくちゃね～

０７　いい加減本題に入ってほしい・・・（泣）（後書き）

まだ戦ってません！

棘の中では、もう本題に入るつもりだったんですｏｒｚ

てか、バトル？に入る気だったんです

内容薄くてすいません・・・こんな棘の小説ですが、まだまだ続くので

呼んでくださいね！！

０８　王子様はお姫様を助けに行くもんなんです！（前書き）

タイトルの王子様は紫苑です。お姫様は美鈴です。
沙羅は町の人Ａってとこです（苦笑）

０８　王子様はお姫様を助けに行くもんなんです！

～ＳＩＤＥ沙羅～

まずは、下準備と言う事で・・・

『変換　声』

・・・あ～あ～只今マイクのテスト中、只今マイクのテスト中
よし、これで変えると思考の声まで変わるからね～
確認が楽でいいよ♪うん、念話も変わんないからね

でわでわ、本番に行ってみますか！

～ＳＩＤＥ紫苑～

ぼーっといろんな廊下を歩いてると念話が入ってきた

アイツだ、俺はどうせ大した事ないと思っていた

けれど、

【紫苑！助けてっ！やばい！】

なんてアイツのいつになく真剣な声を聞いたら行くしかない

幸いにもアイツの魔力ならどこにいたって俺は探れる

「Cの裏か！」

間に合うか！？かなり遠いしがんばっても5分はかかるぞ

あぁもう！走るなんてまどろっこしい事やってらんねえ！

『強化　脚』

脚を強化して走る、走る走る

間に合ってくれ！

～ＳＩＤＥ　沙羅～

これで～王子様はお姫様を助けに来るよね～

んじゃ、脇役1号はおとなしく悪役の餌食になっておきますか

・・・キモい、予想以上にキモい

近寄ってみると更にヤバイ

なんだよコレ～ぶにょぶにょしてる～しかもドロドロしてる～

まぁいいや！女は度胸！いけっ沙羅！

どぽんっ

トロールワールドへレッツゴー！

ああキモい・・・（泣）

こういうのって術者の性格が絶対出るわ

０８　王子様はお姫様を助けに行くもんなんです！（後書き）

魔法についての補足です

０７ではカロールが詠唱してたのに、なんで０８で沙羅と紫苑は詠唱してないんだ！という問題についてですが、

魔法はあるラインの魔力消費量を超えると
詠唱が必要になるんです

そのラインとは個人の才能に左右されるので、一概には言えませんが、沙羅はカロールの大技くらいの魔法なら詠唱しないでも出来ます。紫苑、美鈴は無理です。
樹花はぎりぎりのラインです

ま、そんな感じでこれからもちょいちょい書いていきます

０９　王子マジで走ります（前書き）

更新遅れました。

卒業式とかでばたばたしてました。

09　王子マジで走ります

～ＳＩＤＥ　沙羅～

私は今、淀んだドブみたいな空間にいる。

言うまでもなく、あのトロールの作った空間の中である

私の身体は今ドロドロした物体Ｘに縛られて動けないようにされている

おまけに、能力行使不可の設定までされている

まぁ、こんなもの私には何の効力も持たないけど（笑）

『拘束術　解除』

まずは～、拘束してたドロドロしたのをはずして～

次に～

『ハッキング開始　対象・虚ろな世界　術者・レティオス＝Ｈ＝カロール』

穴を開けて～ばれないように表面は隠して～

でっきあっがり～♪

これに王子様は気づいてくれるのかな？
いや、気づいてもらわなきゃいけないんだけど・・・

でもあからさまにすると空けといたってばれるからな～
ちょっと叩けば空くくらいに一応設定しておくか

『設定追加　打撃　レベル・５』

このくらいかな～５で良いよね樹花基準だけど・・・

大丈夫なはず！彼なら！

・・・たぶん

～ＳＩＤＥ　紫苑～

俺は今走っていた。

きっとこの調子で行けば１分かからずに着くだろう

俺の頭の中は混乱していた

美鈴は無事なのか？
沙羅は無事なのか？
どちらか一方だけが無事なのか？

両方とも無事なのか？

ーーそれとも・・・どちらも・・・

そこまで考えて俺は必死に頭を振ってその考えを振り払った

・・・ハハそんな訳ないじゃないか、あの美鈴だぞ、きっと大丈夫だよ

そう、きっと大丈夫

俺は自分に必死に言い聞かせていた

とりあえず今は走るんだ！俺！

≪紫苑が目的地に着くまであと０分４９秒≫

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3180j/

娑羅双樹

2011年1月28日02時36分発行